

栗原祐幸氏(元防衛庁長官)  
インタビュー

**1996/12/21**  
**栗原氏自宅**  
**(三島市)**

栗原 (栗原氏の著書『大平元総理と私』をさして)どこで求められたんですか。

村田 これはですね。私の同僚が持っておりまして、昔外交史料館に勤めておりました人間なものですから、東京でどこかで多分手に入れたんだと思うんですが。

村田 なるほど。今日は、防衛庁長官時代のお話を中心に伺いたいと思いますが、中曽根内閣で防衛庁長官を先生は2回おやりになってますが、まずその 最初ですね、ご入閣の経緯っていうんでしょうか、その辺のところから、防衛庁長官って必ずしもそれまで、先生労働大臣はお勤めになっていきますけれど、いわゆる防衛族とか、国防族とか言われる政治家ではいらっしやらなかったと思うのですが。防衛庁長官にご入閣という経緯についてちょっとお話を聞かせてください。

栗原 それは、中曽根さんが僕を防衛庁長官に適任者と見たんでしょうな。もっとも適任者とみられたのはこれが始めてではないんです。私が、政務次官になったのは参議院時代だったんです。内閣は、佐藤内閣の時だったんです。その時に私は、参議院側からは通産政務次官ということでリストがいったらしいんです。ところが佐藤総理が、この参議院から7~8名いったんでしょう、リストを見て、栗原君はいいけれども、防衛政務次官にしろと、こういうふうにな、言ったんですよ。その時の参議院の幹事長が迫水久常さんて言ってね。例の終戦の時の内閣書記官長か何かやった人です。いやこれ参議院からの推薦なんで、そう簡単にいきませんと言ったら、内閣がいいよいいよ、栗原君に俺が話をするからということだったらしいんだね。ところが、あの頃派閥が非常にきつい時ですから、栗原君は河野派だから、河野謙三さんに、話をしなきゃいけないと言うんで、迫水さんが河野さんに話をしたら、河野さんが栗原君には、経済の勉強もさせたいからというので断ったんですよ。そしたら、佐藤さんが任命権者は俺なんだ、河野謙三じゃないと怒ったそうです。迫水さんもしょろがないから、それでは総理の勝手にしてくださいと言ったと聞きました。その頃の派閥は非常に強かったんです。そういう経過があるんです。佐藤さんは僕をよく知っているわけじゃないんだろうけれども、防衛政務次官と言ったんです。中曽根さんの場合は、あの頃は日米関係、特に防衛関係を非常に彼は大事にしましたからね。そこで僕も向いているかどうか知らんけども、栗原っていうふうに任命したんですね。派閥の方ではたぶん、運輸大臣か何かって言ったらしいんですけど。中曽根さんというのは、今話があった旧河野派の中で、私を知っていますからね。私が、防衛に適任なんだと思ったんじゃないですか。私は今までいろいろやりましたけども。一回も自分で希望したことないんです。大臣にしてくれとか、何々大臣してくれとか、あるいは党の方の何々してくれなんてないんです。お呼びがかかれば出て行こう、お呼びがなければ出て行かないと、大変な自信家なんだね。だから特に私が防衛を望んだってことはない…。

村田 その防衛庁長官というですね、総理からのご指名があった時には、例えば、派閥では運輸大臣とお考えだったと、特にご不満ではございませんでしたか。すでに閣僚経験をお持ちで…。

栗原 僕はね、何でもやれるのが本当の政治家であって、特にこれがやりたいっていうのは別ですが、そうでない限りは、何でもこなせるのが本当の政治家だと思っているんです。これやると非常に政治資金が集まるとか、あるいはこれは将来のためにいいとかということはないんですな。例えば、労働大臣の時には、雇用情勢が大変難しかったんですよ。で、大平さんは、これ(栗原氏著書)に書いたかどうか知らんけど、僕を官房長官にするつもりだったらしいんです。だけど、私は参議院から衆議院に移ったもんですから、言うなれば、大平派の中ではよそから来た者なんですな。政治の社会は、大変な嫉妬の海でね。何で大平は栗原君を重要視するんだと言われたんです。ずいぶん重要なこと全部私に相談したからね。大平さんが僕を労働大臣にしたきっかけの一因は、今丁度本を書いているんですよ。その中に、遠藤政夫君という人物(彼は参議院ですけど、労働省の職業安定局長をやった男)が出てきます。この人物はいわゆる宏池会のメンバーで。大平さんのとこに行って、今非常に雇用情勢(昭和 53 年、4 年ですから、)が悪いので今までは派閥次元で人事としてきたが、今度はそうでなくて、やはり大平派からパリッとした人を出してくださいと言ったらしいんだね。後になって遠藤君がえらい恐縮してね、官房長官になる、するつもりだったのに、労働大臣ということことでと言い訳をしておりました。労働大臣も結構難しいんですよ。専門語はいっぱいでね。防衛の方も専門語がいっぱいでね。いわゆるスペシャリストの大臣でないと骨が折れるということなんだね。しかし、僕はジェネラリストだから何でもこなせると思っていたんだね。

村田 ご出発はむしろでも農林って言いますか、そうですねえ。

栗原 だから、皆は僕の農林大臣を希望したんじゃないですか。僕が通産政務次官になった時もそうだけど。ただ私は、ずっとこう観察しておって、栗原君は防衛と、いうのは中曽根さんが特に望みましたね。だから、2 回目は、派閥はぜんぜん推薦しない。一本釣りですよ、私だけは。

村田 そうですか。2 回目の入閣の時も中曽根さんのご指名ということですね。

栗原 それはもう強引に引き抜いたわけだから。

村田 先生、どういうふうに思われました。2 回目、同じポストを同じ内閣で 2 回長官を、まあ加藤さんもその間 2 回やっていたらしゃいますけれども、これは続いてですよ。先

生の場合は、初め1回と加藤さん挟んでもう一度おやりになるというので、先生自身はそれは…。

栗原 それは、日米安保の関係でね。並々ならぬ総理大臣の意欲だと思いますよ。中曽根さんは私を呼んで、栗原君、私の内閣で特に重要なのは、官房長官と大蔵大臣とそれから外務大臣と防衛庁長官だ。外務大臣は倉成君にしたけれども(倉成さんですね、中曽根派ですから)、これは私が直接言うからいいです。官房長官は後藤田君です。それから大蔵大臣は宮沢君。あなたには大変ご苦勞かけるけど、是非よろしくと、言うものですから。最終決定は総理ですけれども、私が全部やりますよ。よろしいかなって…。結構ですよと。という訳なんで…。

村田 1回目の時もそうですが、中曽根総理は、防衛・安全保障面非常に関心が強い総理でいらっしゃるよ。すると、その2回目はその同じ時に、先生が私が全部やりますとおっしゃって、中曽根さんがいいですとおっしゃったということですが。どうなんでしょう。1回目の時もですね、その安全保障に感心の強い総理と防衛庁長官とは役割分担と言いましょうか、難しかったってことはないですか。

栗原 全然。中曽根さんはどちらかっていうと、進んで進んでの方ですよ。僕は、進むのはいいけど、着実に進まないと。そういうことすな。中曽根さんの場合、進んで進んでですから、あの人が進めっていうとみんながちょっと用心したんだね。僕の場合は、いわゆるそう言っちゃおかしいけど、複眼的に見てね、どう歩くべきかと、バランスをとりながら進んでいくということだろうね。自分で言うちょっとキザになるがね。それでなかったら、とても大変なんですよ。例えば、防衛費の1%を超える場合でもFSXの場合でも大変なんですね、いろいろと。自民党内だけじゃなくって、野党のこととか、マスコミ等。ですから、やはり、そういう意味で僕が適任だって考えたんでしょな。

村田 なるほど。第1回目ですね、長官時代にですね。一番大きな、何て言いましょうか、ご記憶に残る大きな政策 이슈とか問題とかあるでしょうか。先生が熱心に取り組まれたもので…。

栗原 それは例の三宅島のNLPですね。夜間離着陸訓練飛行場を三宅島に作るということですね。これが大きなまあ 이슈でしょうね。

村田 今、ちょっとお話に出ましたGNPの1%突破なんですけれども、それは2回目の長官時代ですね。あの時は、大蔵大臣は宮沢さんでございますね。で、ええ、つまり同じ大平派で…、もう宮沢派になっているんでしょうか。従って言うならば、派閥の宮沢さん

が領袖でいらっしゃる訳ですね。で、その大蔵大臣と防衛庁長官としてその1%突破をめぐってですね、どういう関係といたしますか、お立場が違うってことがあったのでしょうか。

栗原 僕はね、国務大臣ですから、宮沢さんの派閥の領袖とか何とかということには意識してませんから、対等ですから。従って、最初1%越えるかもしれないからと僕が宮沢さんに話したところが、宮沢さんが、いやあそうですねえ、たいしたことありませんねえと言ったんです。1%以内に収めるといった強い力がかかってきてから、彼が躊躇してしまっただけですよ。形の上では宮沢さんが屈服した形です。

村田 1%を越えるというのは総理の強いご意向ではないんですか。

栗原 総理は1%を越えよということは一言も言っていませんよ。僕が1%を越えるかもしれないけどということは言って、ただしあなたは動いて下さるなと言ったんです。あの頃は売上税の問題があってね、国会が大変な時期で、方々から圧力がかかってきた。しかも、円高が進んできましたから、十分に1%以内でやれるとこういう宣伝が効いてきたので、一時彼が消極的になってきた。本当はやりたいんだけどなかなかできない。読売の渡辺社長なんか彼のブレーンですよ。その渡辺氏や金丸信さんも、売上税があるときにこのようなものをやるべきではないと。最後は非常に彼は苦しくなってきたんですよ。そこで私が何を言うとかと中曽根さんに強く所信を述べたわけです。

村田 先生が1%を越えるべきだというふうに総理に言われた理由というのは、積み上げてきたものを客観的に判断すれば越えざるを得ないということですか。

栗原 あのと、駐留軍が雇用している従業員。その給料をアメリカが持たねばいかんでしょう。そうすると、円が高くなってくるとドルを多く持ち出さなければいかん何とかしてくれという話があって、いよいよ面倒をみなければ、外交問題にまで発展して行くんだ。これがアメリカ議会で大問題になると、結論的にはこれは首切りですから国内の労働問題にも影響する。そういうことで、面倒をみるかということで、いわゆる思いやり論で、これを積もうと決心しました。これを積むと、自衛隊の宿舎とか隊舎とか後方設備が非常に遅れているでしょう。アメリカ側には積めるけど、自衛隊の後方には積めなかったということになれば、何処の長官だということになるでしょ。そんな馬鹿なことはない。アメリカに積むならば、日本の方もそれに見合ったものを積まなければならない。しかし、それを積みば1%を越えるかもしれないと総理と宮沢さんに話したわけですよ。総理は、いいでしょうと。1億ドル積むことについてね。宮沢さんもいいでしょうであったんですよ。あるいは1%を越えるかもしれないということは総理も考えておったんですよし、宮沢さんも考えていたんですよ。例の売り上げ税との問題があるのでヘジテイトしてしまっ

んですなあ。

村田 前後2回に渡ってですね間をあけて長官をなさってますねえ。その間80年代はじめと後半になるわけですが、防衛庁の、あるいは日本政府の認識というものでしょうか、そのようなものに対する共有認識というものがその間大きな変化みたいなものがございましたでしょうか。

栗原 なかったですね。なかったけど、僕がワインバーガーと話をするときにはすぐに、日米防衛問題に入らなかったですよ。アメリカはソ連の脅威、脅威というけどね、アメリカはなぜソ連の脅威を言うんだということから聞いたんです。日本はアメリカと違って、ソ連は脅威といえば脅威だけれど、国民の実感としては脅威というのはあまりない。脅威の感覚が。アメリカの方の脅威は非常に強烈に聞こえる。あんた方は何故ソ連の脅威を強調するのだという話から始めて、軍縮はできないもんだろうかと大きな外交問題から入ったんです。そして、地球儀を見て、ソ連の動きはこれこれだから、こちらも準備をするという話はわからんじゃないけども、そういういたちごっこのようなことをやるべきじゃないのではないかと言ったこともある。これに対して、アメリカの方も1970年代は平均して年20%軍事費を削減して控えていたらその間にソ連がどンドンどンドンやってきた。そこで、これじゃいけないといった事態となったんだと。説得ある話をしたから、それでは日米の防衛問題に入りましょうということになったのです。

村田 防衛庁内でもソ連の極東ソ連軍が非常に危険であるとか、そういう風な認識はそんなに強くなかったのでしょうか。

栗原 そりゃあ、アメリカの認識と大体同じですわなあ。情報を何処から取れるかといえば、アメリカの情報ですよ。軍事情報はねえ。言ってみればコピーみたいなもんだ。日本に独自の収集能力なんかないんだから。向こうに外務省の出先があっても、新聞を見て翻訳するぐらいなもんだね。

村田 確かにですねえ、極東のソ連軍がですねえ。ミンスクがやって来たり、極東ソ連軍が増強されて、アフガニスタンが79年にあって、80年初頭くらいからソ連脅威論が巷でもいろんな本がでたりしましたよねえ。しかしそのう、軍事的にみてですね、ソ連軍が北海道に強襲上陸するとかですね、日本に攻めてくるかもしれないとかですね、そういう差し迫った共有意識をお持ちではあったわけではないですね。防衛庁としては。

栗原 少なくとも、私はそういうものはなかったなあ。むしろ、脅威脅威とアメリカは言うけれども、本当に脅威はあるのかと分かりませんよ。直接何も調べているわけではあり

ませんから。そこで、いっぺんアメリカに確かめる必要があったと思っていました。これは、私が第1回目の防衛庁長官の時かなあ、アメリカからヨーロッパをまわって、ブリュッセルでNATOの総司令官ロジャース大将の表敬訪問を受けたんです。これも前代未聞だそうですね。それで、いろいろ話を聞いてみたら、これはやっぱりすごいな、現地は。NATOとワルシャワの関係はすごい。核ボタンを押すか押さないかの問題でね、大統領が核ボタンを本当に押してくれるかどうか心配だというのが、その時の総司令官の話なんだな。僕はワインバーガーと話をしていたから、なるほど現地はなあ。アメリカの脅威というのは極東と言うよりもNATOの方が、ひしひしと感じているのだなあと思ったなあ。

**村田** 1度目にお務めになった時と2度目にお務めになった時とですねえ、日米の防衛協力はずいぶん進歩していたですか、この間。

**栗原** それはねえ、後でねえ、私を書いた本がありますから。それを差し上げますから。

**村田** 今お書きになっている本ですか。

**栗原** ずいぶん前に書いた本があるんですが。今書いている本は、ワインバーガーが僕にラブレターをたくさんくれたわけです。2回目の防衛庁長官時代に。20何通だからね。それは最大級のほめ言葉ですよ。Extra Ordinaryといった表現で私を賞賛してる訳です。アメリカからしても極めて満足だったんじゃないですか。アメリカに対してはずいぶん言うことも言いましたけどね。FSXは日米の一番最初の合意ですね、私とワインバーガーの。あれは妥当な線なんです。アメリカの方からすると日本はアメリカの要求を飲んだと見てるけど、そうじゃなくて、けっこうこちらの方も得してるんですよ。その後ブッシュになってから変わっちゃったけど。

**村田** もうちょっとそのへんのところ詳しくお聞かせ願えませんか。得をしたところを。日本側が得をしたというところを。つまり自主開発ではなくて、共同開発をというところを。

**栗原** それは、日米の技術を持ち寄るってことですよ。しかも日本の技術を大幅に入れるってことです。こんなことは許さないんですよ日米関係には今までは。向こうは俺達の方は主人公で、日本は家来だと思っているんですから。防衛関係については。それが自主開発をするとは何事だと。アメリカの良い航空機を買えばいいじゃないか。自主開発は大変コストもかかるし、リスクがあるんだと盛んに牽制したんです。しかし、せっかく日本に良い技術があるんだから、日本の技術とアメリカの技術をあわせてね、最先端の技術、そしてよりよいものを作る。そういう意味での開発をしたいと考えたんです。

村田 それは、日本側が言ったということですか。栗原先生を通じて日本側が言ったことですか。おおよそそういう意向だったんですか。

栗原 そうそう。

村田 最初は自主開発というオプションがありましたよね。

栗原 それは当然のことだね。いわゆる日本の技術がここまで大きくなってきたんだから。特に航空機産業なんかそうですよ。自主開発しなければ、航空機の継承ができないでしょう。航空技術が。防衛産業というのは、いろいろの国内産業との関連がありますから。防衛産業はそういう気持ちを持つ、いわゆるナショナリズムから言うてもね、国産というのは大事ですよ。しかし日米安保ですからその点も考えねばならない。それにコストの問題や危険の問題とかいろいろあるから。そこら辺を総合的にみなくちゃいかんということになるんだね。

村田 ということは、自主開発というは選択肢はオプションとしてあったけれども、防衛庁首脳総合判断としてはそんなに優先順位の高いオプションでは初めからなかったのですね。

栗原 どうかね。加藤君は知らないが。

村田 先生にとってはそんなに優先順位が高いオプションではなかった…。

栗原 僕はそう多くはないよ。だってね、エンジンが人質に取られているんだから。そうでしょ。自主開発をしようとがんばるならば、勝手にしろと言われてますよ。エンジンをくれませんよ。それじゃ、エンジンをアメリカから買わずにイギリスから買うなんて言えば、その時は経済摩擦。大変なことですよ。僕は、それを何にも分からないで、国産だ、国産だと言っているのは何を言ってるんだと思ったね。ただし、アメリカの言う通りになる必要はない。できるだけこちらのもを入れていこうというのが、私の戦略でしたね。だから防衛庁のなかでも、航空自衛隊とか技術本部が、独自でやりたいと言ったり、三菱重工も何とかあったけど、それは聞き置いて、最終判断は私がすると言って取り合わなかったね。

村田 先生は共同開発と。



栗原 いわゆる共同開発というか、私の第一の優先順位は、アメリカと日本の技術を持ち寄って新たなものを作ることですよ。これが第一順位。ところが、いろいろ折衝しているうちに、アメリカの方で、ワインバーガーの考え方だけでも、アメリカの航空機も非常に良いから、これを基本にして検討してみてもらいたいと提案があったんです。朝日新聞でね、FSX という本を出版しているんです。それここに書いてありますから、これをあなたに差し上げよう。それじゃあ。

村田 それは先生のご本なんですか。

栗原 これは3冊目なんだけどね。

村田 今もう1冊お書きになっているのですか。

栗原 今のは5冊目だ。

村田 ああそうですか。

栗原 これにはね、防衛庁長官時代というのがありますからね、これを見てもらえればね、だいたい分かるね。

栗原 第5章に、防衛庁長官時代というのがある、それに今私が述べたているようなことがだいたい書いてある。それで、参考として、手島君(NHK)のやつと大月君(朝日)のやつ、の抜粋が書いてある。ちょっと読んだ方が早いかな。

(切れる)

村田 今ちょっと拝見したんですが、大月著ですね。日米FSX戦争の栗原ワインバーガー会談というのですか、オークラで行われた。この経緯というのは、ほぼ正確ですか。

栗原 これはね、僕の態度については抑えて、褒めすぎてはいけないという書き方ですね。もう一つの手島君の方は、いささか褒め過ぎだ。事実と違うところがある。朝日は大月君と本田君というのが取材したんです。アメリカからも取材に来たんですから。ワインバーガーも本を出したでしょ。その中にもずいぶん大きく書いてありますよ。

村田 そうですね、“Fighting for Peace”という本ですね。先生としてはですね、その後の経緯はどのふうにご覧になりました。それはもちろん長官でいらっしやらないのです

けど、ブッシュ政権になって話が変わってくるのですが、そういう経緯についてどういう風にご覧になっていらっしゃいましたか。

栗原 大変遺憾だね。ワインバーガーと自分たちがやったやつでしょ。それをブッシュに代わってから変えられちゃったでしょ。非常に批判的です。要するに最終的には外交というのは国と国との力関係なんだけど、役者ですよ。相手になめられる役者となめられない役者と違ってくるのですよ。だから、お世辞をただ言う外務大臣、お世辞をただ言う防衛庁長官ではだめなんだよね。その時々丁々発止でなければ。英語ができるのは一番良いんですが、英語ができなくても人間というのは動作で分かりますわな。私の場合は、理不尽のことは断じていかんということですから、ワインバーガーも譲ったんじゃないですか。

村田 なるほど。、ワインバーガー長官の回顧録ですもんね、今お話しになった、栗原裕幸という名前が何度も出てきて、退任後も栗原家に招かれたという話が出て参りますけど、ワインバーガーさんとのとりわけ親密な関係というのは、最初にお会いになった頃から割とすぐにできたのですか、あるいはきっかけというものがあるのですか。やっぱり2回お務めになったことが大きいのですか。

栗原 向こうの方からえらく僕に接近してきたんですよ。別にベタベタする仲ではないですよ。

村田 もう1つお尋ねしたいのですが、これはもう、先生が長官におなりになる前ですが、78年の夏に、福田内閣ですもんね、日米防衛協力の指針ガイドラインというのが策定されて、その後、日本有事の研究ですとか、極東有事の研究ですとかいろいろな研究が実務レベルで進んで参りますのですが、先生のご在任中にですね、例えばシーレーンの防衛研究とかが先生のご在任中にまとまっているんじゃないでしょうか。86年に首相に報告されている。ご覧になってますか。そういう各種の研究報告とか長官としてつぶさにご覧になっているのでしょうか。

栗原 いやあ、私は見ていませんねえ。

村田 見ていませんか。

栗原 実際問題としちゃあ、そういうことで動いているのではないんですよ。

村田 とおっしゃいますと。

栗原 実際問題としては、現実的に国会のやりとりをどうするかですからね。シーレーンを面として考えると、これは憲法違反になっちゃうんです。今の憲法の枠組みの中では、面として考えさせたくないんですよ。点として考えなくては。もっと言うと、シーレーンというのは、機能として考えなくては。こういうところだと思っただけ。野党が面としてシーレーンと言うが、いやそうじゃないそれは機能の問題だと政府は反論するんです。